

ただ日本史の研究のみはその対象の限定から西洋の歴史学よりもむしろ国学や水戸学の伝統を承けて発達し來つた。それがためにその方法の嚴密さとその成果の高さにもかゝわらず、そこに一種特有の學風が伴ない、他の諸科学とは違つた色彩を有つこととなり、そこにやゝもすれば偏狹固陋にして夜郎自大の弊をも生ずることとなつたのであるが、今や

そのような學問の日本的傳統は全く打ちくたかれ、われわれは自國の歴史を新に世界史的に——ということとは究極は西洋的に——見なければならぬような時代に達したのである。さすれば日本史を學ぶものは今まで国学や水戸學の傳統について知つていたと同様に今後西洋人の日本歴史觀の歴史について學ぶところがなければならぬといふべきであらう。

「歐米人の日本人觀」といつた書物は必ずしも従來なかつたわけではない（確か古く文明協會叢書の中に同じ題目の書物があつた筈である）が、本書がそうした書物にありがちな多くの書物からの引用の羅列や梗概の單なる紹介に終らないで、種多な意見の間に系統を立て、それらの發展を歴史的にたどると共に

その歸趨をも見定めようといつとめられたのは畢竟著者が上に述べたようなわが國史學の傳統に対する深い反省と、今後それが如何あるべきかについての切実な問題を抱いておられることから來るものであつて、著者が隨所に述べられている自己反省の言葉には評者も亦共感を禁じえないものがある。

最後に著者に希望するところは、本書においてとり上げられた西洋人の諸著作は本文中において、いずれも簡略な日本語名に訳されては、將來の研究者のためにそのフル・タイトルを卷末にでもとりまとめて表示されると共に、引用の条項についてはやはり参照頁を記載するだけの勞を惜しまないでほしかつたことである。人名並に事項索引もこの種の著作においては特に不可欠のものであることを切言したい。（B6版・二八六頁原文堂發行定価二五〇）

—柴田 実—

米村嘉男 著

「モヨロ貝塚資料集」

実のところわれわれが北海道網走のモヨロ

貝塚の名を知つたのは昭和二十二年夏の東西考古学会及網走郷土博物館の協同調査によるのであるが、既にそれ以前三十數年に亘る米村氏の調査があつたのである。一口に三十數年というけれど、一人の人にとつてそれがどんなに長い年月であらうか、その長い年月の間一つの遺跡の保存と顕彰に生涯の情熱をかけたモヨロ貝塚の全貌が一目瞭然と明示されたのがこの「モヨロ貝塚資料集」である。何よりも先にこの成果を導かれた氏の努力に敬意を表したい。

モヨロ貝塚はオホーツク海にのぞむ網走市を貫流する網走川の河口北岸の砂浜にある遺跡である。附近には此他にも点々と縄文式以後近代アイヌに亘る各時代の遺蹟が発見され、五百軒に亘る北見沿岸唯一の良港である当市が早くから好適な聚落地であつたことを示している。

モヨロ貝塚は約三ヘクタールに及ぶ保安林全般に淡鹹各種の貝による貝層が見られ、其処から二十八個の堅穴と百數十体の人骨が発見されている。堅穴は南の地区に多い大型堅穴と北の地区に見られる小型堅穴の二種類が

ある。小型の堅穴は未だ精査されていないが大形のそれは径十米を超える不規則な矩形で中央に自然石をならべた炉がつくられ、その周辺は粘土でふみかためられた床面をつくつてゐる。その北西隅に熊を主とした獣の頭骨が一群発見されて、祭壇が屋内に設けられたことが知られた。この様な大型堅穴に接して平地に小型の炉を築いた平地住居が発見されていて前者が冬後者が夏の住居と考えられ、住居に季節的変化のあつたことが推されるのは大変興味深いことである。墓は堅穴と同様の風葬と近代アイヌに因襲すると思はれる伸展葬がある。前者では堅穴を掘つて仰臥風葬し、頭部に藁を被せ、その上を二三十糶の平石で覆つた葬法が最も多いが、木柙の中に入れて砂をかぶせた例や小型箱式石棺の内に屍骨を埋葬した例等も発見されている。

遺物としては石器、玉器、土器、骨角器、牙器、金属器等があげられる。石器は比較的少いが、石斧、石鎗、石七、石鏃等各種の変化に富んでいる。玉器としては扁平な小型玉環が発見されている。骨角牙器は最も変化に富み鉞、釣針、斧、鋏、等あるが、中でも鉞

と斧、鋏は此時代を特徴づけるものである。土器は縄文土式、前北式、後北式、オホーツク式、刻文式等数種の形式のものが見られるが、本遺蹟を代表するものはオホーツク式——米村氏は特にモヨロ式と名付けて千島樺太等の地方差を考へていられる——である。これらの土器は壺形と甕形と鉢形との三種があるが、それには口喙頭、肩等に文様が施されている。文様で最も特徴のあるのはソーマン土器と呼ばれる様に極めて細い粘土紐をはりつけてつくつた文様で、時には簡単な動物を表現したもの等もある。其他刻文、突瘤文等も見られる。一般に文様としては縄文式土器、後北式土器等に比較して単純であるといえる。

土器に比べて數こそ少いが注目せねばならぬ遺物として金属器がある。刀、刀子、鉞、斧等の鉄製品と古銭環等の青銅製品がある。鉄製品の蕨牛刀と柄の内反した刀子青銅製品としては景祐元宝等がオホーツク式文化の絶対年代を決定する資料として重要なものである。

この様な遺蹟遺物より見た時モヨロ具環の

起源は古く遡るが、今約千年前のオホーツク式文化時代に最盛期を迎えたと考えられ、そのオホーツク式文化とは縄文式時代人でもなければアイヌでもない、北方的な人々によつて作られ、石器、角器と共に金属器を輸入していた文化であると考えられていられる。ところがオホーツク式土器については北海道—南部地方に盛行されていた他ヶ岡式が次第に北上して—中略—北見沿岸に使用される様になつた。それから間もない頃オホーツク式土器は樺太から南下して宗谷へ渡つて来たが、日本海沿岸では勝れた他ヶ岡式土器が盛行していたため、幼稚なオホーツク式土器は受け入れられず、土器文化の低い北見沿岸地帯に受け入れられて次第に東方にすすみ、遂に根室に達したが、太平洋沿岸もまた既にオホーツク式土器以上のものが盛行していたため、ここからも南下せず千島の低い方へ流れて行つたものである。他の海岸では多く見られる他ヶ岡式土器も、このオホーツク海沿岸の地域に於ては僅かの発見に過ぎないところからも推察することが出来る、としておられる。此点米

村氏の他ヶ岡式土器に対する考えはわれわれ

の知つてゐる編年の研究の結果と差がある様で、ひいてオホーツク式土器の編年の位置についての把握も不明確な点が多い様に思はれる。更に又遺蹟の性質から墳墓、堅穴等の一括遺物を中心に精細な型式学的研究に及ばれる事があれば一層完全なものになつたのではなかつたかと考えられる。とまれオホーツク式文化の最良遺蹟の資料集が六二頁にもわたる豊富な図版——中には数葉故杉山寿榮男氏の図があつてわれわれを懐古の気分にかさつてくれるものもある——を主として出版されたことは学界の為に喜ぶべき事と言はねばならぬ。最後に余り豪華な為われわれ貧書生にとつて高峰の花である点が現下の状態のもと余儀ないとしても本書の唯一の欠点であると思はれる。(版・網走郷土博物館、野村書店 本文82図版62、頒価二〇〇円)

—坪井 博足—

× × × × ×

口 絵 解 説

グプタ時代の銅板文書

グプタ朝及び以後の印度に於ては、土地又は村落の譲与売買抵当の場合には、多く銅板に所定の事項を刻し、之を郡又は政府に保管し、後日の証拠書類とした。地券に当るものである。之には郡又は政府の印が捺されてあつて、この発行によつて、公式の上級所有権が認められたことになる。その形式は一定しておつて、最初に、その譲与その他の行はれた時の統治者たる王とその系譜並びに紀年を記し、次に之を行方人の系譜を記し、次に証人として関係者を列記し、次にその譲与その他に伴う税賦その他の具体的な内容並びに境界を詳記し、最後に、該文書の起草者と伝達責任者を記している。婆羅門がこの種の銅板文書を偽造し、免税の特典を享受しているのを知つて、ハルシヤヴァルダナ(戒日王)が、その文書を破壊したことを記した文書がある。之等文書は大抵銅板であるが、他の金属との合金もあり、黄金のものも現存している。之は銅職人その他之を専門とせる下級職人によつて刻せられ、税賦の変更によつて、後の時代にその箇所を抹殺し、新しい税額を刻したものも現存している。

(佐藤幸四郎)

銀製錬の図

これは銀製錬の最終工程を示す図である。南蛮絞りにかけた灰吹銀を採る工程はこの絵巻の、この図に先立つ二枚の図に示されている。

(1) 合かね(含銀銅と鉛)を南蛮絞りにして、銀鉛の湯は一緒にになり、鉛壺に落ちて形如くに相成候を垂銀と唱え、此品灰吹床に荒灰吹銀にて吹立て、銅は右南蛮床釜の中にしつらえ候事。

(2) 前条垂銀と唱え候品を、灰吹床にて荒灰吹銀に吹立、鉛者灰之中に有之候に付、灰籠に取上げ留粕と唱え留置き、為粕流と申太床にて銀吹取候事。右の工程に次いで最後に上質の銀をとる工程がこの図である。それは

(3) 鍋三四升入位成を居、重灰一盃入炉作いたし、真中に上銀の本形を以窪を拵、荒灰吹銀を入置吹子管拵差当て上銀に吹立候事

とある。

これは近世後期の生野銀山の製錬工程を示すものであるが(生野鉱業所蔵)、院内銀山の場合も原理的には同一であつた。

(小葉田 淳)